

北総の愛染明王塔と二十六夜塔



佐倉市城 円城寺跡
元禄5年(1692)



八千代市上高野火の見下
文化9年(1812)



印西市瀬戸 徳性院
明治13年(1880)

- 愛染明王塔は、その特徴ある像容とともに、二十六夜待の本尊、また様々な生業の神として人々に信仰された興味深い石塔です。
- 今回は北総に分布する愛染明王像塔・二十六夜塔についてその姿を紹介するとともに、人々は愛染明王に何を祈ったのかを考えてみたいと思います。



成田市奈土昌福寺の
明和7年銘愛染明王塔



船橋市豊富町路傍の
延享3年銘二十六夜塔と
安政5年銘道標付き二十六夜塔

- 愛染明王塔信仰については、本会の三代川千恵子副会長が、『日本の石仏』No.160 (2016) 特集「生業の守護神」に、「石像愛染明王塔の庶民信仰の流れを追って—江戸・甲州・下総の事例から」を書かれています。
- この報告では、中世の武士・修験者の守護神から、近世になって生業の守護神に変化する愛染明王信仰の実態を石造物から調べられ、特に江戸の藍染業者の信仰と、甲州の養蚕や織物業者の二十六夜月待信仰の実態を述べられて、最後に下総農民の二十六夜と愛染明王に関連する石造物について船橋市と八千代市、隣接する佐倉市と旧印旛村所在の36基の一覧表を提示、さらに二十六夜待の本尊が愛染明王である根拠として、「修験深秘行法符咒集」シュゲン シンピ ギョウハウ フジュシュウにその記述があることを明かされておられました。
- この論考に心惹かれて、私も二十六夜塔と愛染明王塔について調べてみたくなり、各地域の石造物調査報告書などを参照して、現地確認の探索を続けています。

● 特集 生業の守護神

石像愛染明王塔の庶民信仰の流れを追って

— 江戸・甲州・下総の事例から —

三代川千恵子

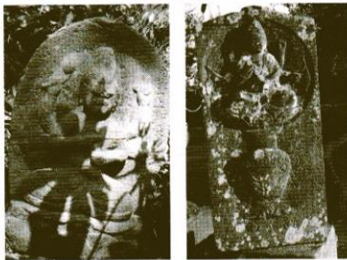
— 愛染明王との出会い —

各地の石仏を見て歩いている時に、路傍の石仏にはない珍しい石仏に会い興味を持ちました。その石仏の像容は三眼六臂、日輪を表す円光を背負い、頭上に獅子冠を戴き、宝瓶上の蓮華座に結跏趺坐し、持ち物は中央の第一左手が腹前で金鈴を、右が胸前で五鈷杵を持ち、上部の第二左手が弓を、右が矢を持ち、下部の第三左手が拳をつくり、右に蓮華を持っているものでした。日本石仏辞典で調べてみると愛染明王と分かりました(写真①、②)。

京都・奈良のお寺巡りをするときには、京都の東寺の観智院、愛染院、奈良の西大寺など真言宗の寺で観音菩薩や不動明王と並び朱に染まった愛染明王に会いました。

子供の頃から、東京浅草の浅草寺の秘仏の本尊聖観音の脇

待に不動明王と愛染明王がいらしたのを見ていました。また今は、千葉県船橋市におりますが、そう遠くない成田山新勝寺には年に一度お参りをしています。成田山新勝寺の旧本堂だった光明堂の本尊は大日如来、脇侍は不動明王と愛染明王でした。気が付けば



②佐倉市本佐倉・麻賀多神社 ①佐倉市弥勒町・松林寺

愛染明王は『瑜祇経』(ゆぎきょう)によって、一面三目・六臂で、頭上には獅子の冠を頂き、冠の上には五鈷鉤(ごここう)が突き出ている、その身は真紅で宝瓶の上にある紅蓮の蓮華座に、日輪を背にして座るとされています。

金剛界大日如来の脇侍として、不動明王と愛染明王を三尊形式で祀ることもあります。



「奈良西大寺展」図録(2017)より



《別尊雑記》より。

愛染明王塔・二十六夜塔の分布

ある地域	基数	ない地域
八千代市	20	市川市
船橋市	10	白井市
旧印旛村	10	千葉市
旧佐原市	10	四街道市
我孫子市	8	芝山町
佐倉市	6	横芝光町
旧本埜村	4	干潟町
成田市	4	
旧印西町	3	
旧小見川町	2	
東庄町	1	
酒々井町	1	
松戸市	1	
富里市	1	
習志野市	1	
計	82	

種別	小計	基数
二十六夜塔	68	
愛染明王像		9
愛染明王の銘・種字		11
他の仏像		9
石灯籠		1
愛染明王塔	13	
愛染明王像		9
愛染明王の銘・種字		4
時念仏塔	1	
愛染明王像		1

紀年銘	基数
江戸前期（寛文～宝永）	11
江戸中期（～享和）	24
江戸後期（～慶応）	27
近代（明治～昭和20年）	14
現代	3
不明	3

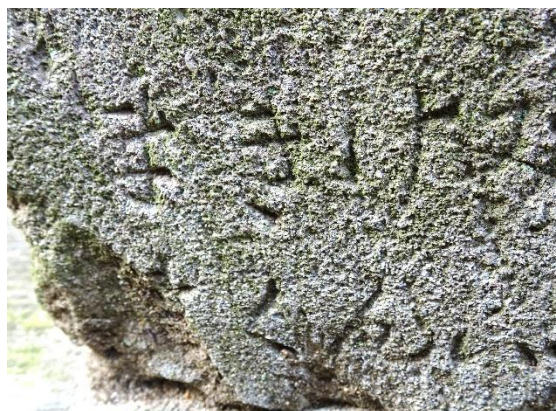
愛染明王塔・二十六夜塔と女人講との関係

銘文から女人講主体とわかる愛染明王塔・二十六夜塔

	江戸中期	江戸後期	現近代	計
印西市	1	3		4
船橋市		2		2
富里市	1			1
旧佐原市	1			1
八千代市			4	4
				12

女人講石塔群にある愛染明王塔・二十六夜塔

八千代市		3		3
印西市		1		1
佐倉市		1		1
				5



天保7年 (1836)
富里市中沢 昌福寺
女性名多数



嘉永元年 (1848)
印西市松虫寺 「女人講中」 銘



印西市平賀仁王尊の大日如来堂前の
延宝二年銘愛染明王像の時念仏塔



『続房総の石仏百選』で早川正司氏および『日本の石仏』No.160の三代川さんの著述に詳しく紹介されている愛染明王像立塔です。

延宝2年（1674）建立、「供養之衆二世安楽処／奉造立愛染明王時念仏」の銘および女性を含む百三十人以上の人名が刻まれている、「時念仏塔」とされています。
「時念仏」とは「斎（とき）念仏」で、食事を伴った念仏講のことです。



印西市平賀仁王尊の
大日如来堂前の三尊の配置

大日堂本尊の石造大日如来
像坐像は寛文4年（1664）
左に愛染明王像、右に延宝6
年（1678）不動明王像があり、
大日如来に愛染明王・不動明
王が脇侍で付く大日三尊形式
です。

塚の下に寛文8年（1668）
の笠付の念仏塔があり、大日
堂では「女念仏」の「切火勤
行時念仏」が行われていまし
た。



佐倉市円城寺跡の元禄5年銘二十六夜塔と 大佐倉麻賀多神社の元禄15年銘愛染明王像塔

円城寺跡の元禄五年（1692）銘愛染明王坐像には「奉造立愛染明王／二十六夜講同行廿二人」の銘が刻まれています。

円城寺跡は、その名も「城」という地名にある「城城」を拠点にした中世前期の六崎氏、中世後期の原氏と並ぶ千葉氏の重臣「円城寺」氏のゆかりの地です。

本佐倉城の傍の大佐倉麻賀多神社にも、元禄15年（1702）銘の愛染明王像塔があります。



将門伝承の地 我孫子市中峠の愛染明王像塔



中峠 宝照院
延享3年（1746）
二十六夜（二十四夜？）塔



中峠 不動尊
寛延元年（1748）
愛染明王供養塔



中峠 不動尊
宝暦11年（1761）
愛染明王供養塔

愛染明王以外の仏像の二十六夜塔



元禄5年(1692)
香取市石納結佐大明神
勢至菩薩像 二十六夜塔



安永9年(1780)
印西市(旧本埜村)中根鳥見神社
地蔵菩薩像 二十六夜塔



馬頭塚

夏見町六丁目 寛政十年(1798)

銘文:(前)「西夏見六夜講中」

この馬頭観音の石塔は、二十六夜講の人びとの手により寛政十年七月に造立されました。

塔の中央には頭上に馬頭の冠を乗せた馬頭観音の姿が描かれています。馬頭観音は観世音菩薩の化身の一つです。馬の保護神として信仰されてきました。船橋市内には馬頭観音の石塔が数多く残されています。地域の人びとが昔から馬を大切にし、馬とともに生活してきたことを裏づける石塔と言えます。

船橋市郷土資料館で展示中

八千代市村上宝喜作台不動堂宝永五年（1708）銘愛染明王種子塔

「ウン」の愛染明王の種子。

宝永五年（1708）「十一月廿六日」銘。

真桑一空が導師となって4村の5人が建立した念仏塔。



船橋市高根町観行院の貞享5年（1748）二十六夜塔

笠付角柱型文字塔で、愛染明王の種字「ウン」
ン」と、「帰命月廿六夜葛飾郡下総国高根村／大
旦那貞享五天辰二月廿六日中興尊恵／願主藤次
郎」ほか10人の人名が刻まれています。



八千代市村上 博物館入り口の寛政5年（1793）銘 愛染明王文字塔

子安大明神石祠と共に祀られていて、女人講信仰物
と考えられます。（下の写真の左側 右は子安石祠）



成田市奈土昌福寺の明和七年銘愛染明王塔

奈土の東光寺廃寺跡から、施主の金岡家の昌福寺境内墓地に移設された明和7年（1770）銘の愛染明王像塔で、『房総の石仏百選』に田中英雄氏が紹介されています。

この愛染明王像は、三眼六臂、日輪を表わす円光背を背負い、獅子冠を戴き、宝瓶の蓮華に結跏趺坐をしています。

円形の日輪に浮彫りした像ですが、ほぼ丸彫りに近く、蓮華座と宝瓶は立体的、さらに蓮弁の反花座と格狭間を施した台石に載る本格的な構造の石像です。

東光寺は天台宗寛永寺末、金岡氏の善楽沙弥と称した人物が元文5年（1740）に再興。文政9年と明治2年に火災に遭い、昭和27年に日光山興雲律院に合併、廃寺となりました。

（『大栄町史 通史編中巻』）



文化8年（1811）～天保9年（1838）の間に、船橋市・佐倉市・八千代市・酒々井町・富里市には、儀規の図像による細密な愛染明王像を浮彫した類似の像塔が建立されています。

いずれも軟質の石材を使用しているため現状不良のことが多い中で、八千代市上高野と酒々井町上本佐倉の像塔は、祠内に安置されていたため保存状態がよく、繊細な浮彫像が残されています。

八千代市上高野の文化8年銘愛染明王塔



江戸後期の愛染明王像塔2（文化期）

船橋市本町道祖神社 文化8年（1811）



佐倉市井野千手院 文化15年（1818）



江戸後期の愛染明王像塔3（文政期）



酒々井町上本佐倉神明大神社
文政10年（1827）



江戸後期の愛染明王像塔4（天保〜嘉永期）



天保7年（1836）
富里市中沢 昌福寺 女性名多数



嘉永元年（1848）
印西市松虫寺 「女人講中」 銘

二十六夜待の江戸での賑わい



江戸では「江戸の六夜待」として近世の江戸で隆盛をきわめた一時期があったという。月齢二十六前後の月は三日月のように細く、東天に姿をみせるのは明け方に近い時間である。7月26日のこの月光の中に、弥陀・観音・勢至の三尊が見えるといって、文化・文政の時代には湯島天神などの高台や芝高輪品川などの海岸は見物客でにぎわい、月待信仰の名を借りた夜遊びの遊興娯楽の行事であったことから、風俗の乱れを懸念する幕府の取り締まりが行われ、天保期に入って急速に廃れたらしい。

八千代市や印西市では「二十六夜塔」文字塔が建てられ、そのほとんどが女人講ですが、下高野のように「若者中」の石塔も見られます。



文化12年(1815)
八千代市下高野道祖神社
「若者中」銘



明治14～平成13年(1881～)5基
八千代市大和田新田上神明社
「女人講中」銘 または女性の連名



道標付きの二十六夜塔 1



安永8年(1779) 道標付二十六夜塔
印西市荒野南の内
「奉待廿六夜講中 南ハ江戸
西ハきおろし」
台石に「女人講中」銘



安政5年(1858) 道標付二十六夜塔
船橋市豊富町路傍

「廿六夜供養塔

東ふ奈およりきおろし道 北おどろばやしより志ろい道
南かなほり口御瀧山ふなはし道 西かまがややわた道
右の二十六夜塔は、延享3年(1746)銘「ウーン」種字塔

道標付きの二十六夜塔2

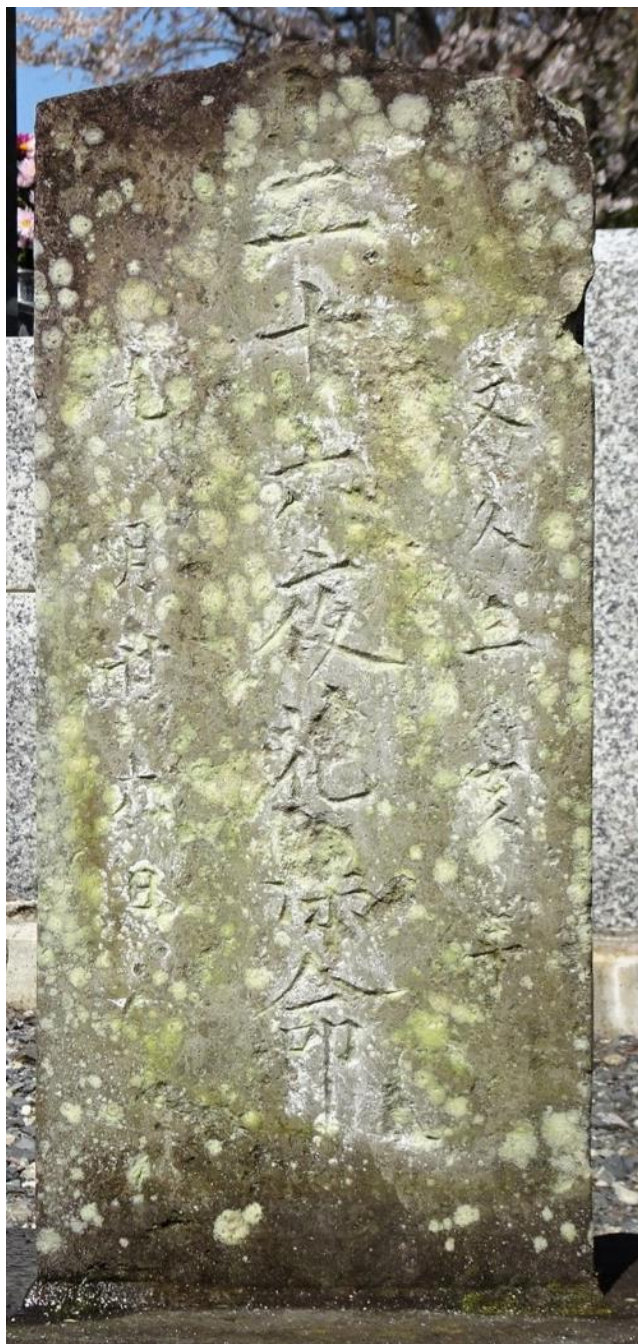


明治10年（1877）道標付二十六夜塔

印西市瀬戸の子育地藏尊

「二十六夜塔／講中廿一人／よしたか／なりたミち
／さくらみち／かまかり／東京道」銘

文久三年「二十六夜花染命」銘塔



旧印旛村岩戸137付近墓地には「二十六夜花染命」の珍しい銘文の二十六夜塔があります。

幕末の神仏分離の風潮のころ、「愛染明王」を「花染命」の神名におき変えたのでしょうか。

愛染明王への祈願で歴史上有名なのは、文永（1271）弘安（1281）の国難に際して、西大寺の叡尊が「末世の凡夫 誠心有難きゆえ諸願また成りがたし 秘密威法を仰ぐにしかず」と岩清水八幡宮に念持仏の愛染明王像を運び、「東風をもって敵船を本国に送り、乗人を損傷することなく、乗船を焼失させ給うように」と祈ったことでした。

そして「神風」が吹いて元寇が撃退された際、愛染明王像の持つ鏑矢が西を指して飛んで蒙古を滅ぼしたといわれ、この霊驗譚は広く流布しました。



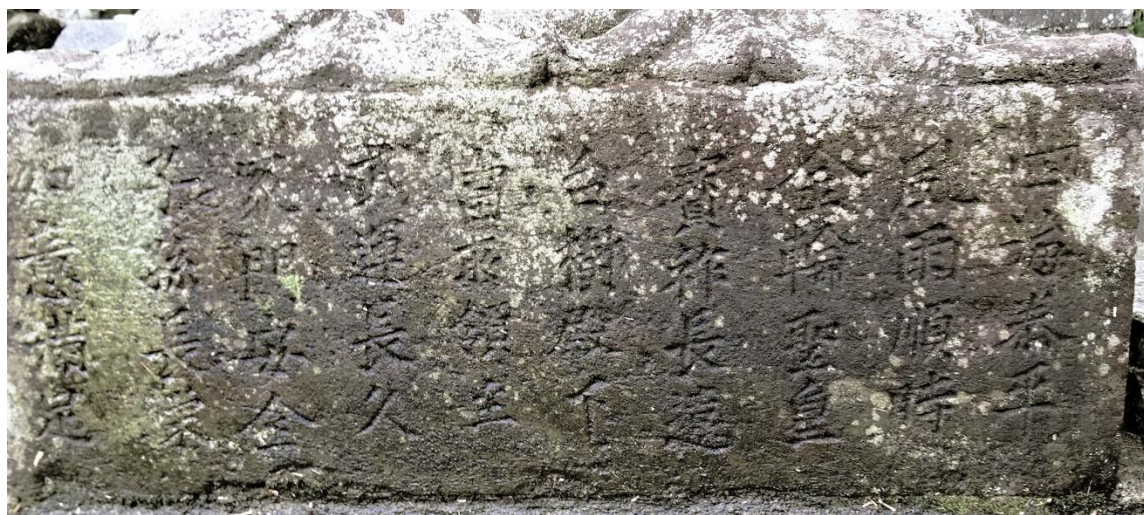
千葉県では、戦国時代に造像された旭市野中の長禅寺の愛染明王像の胎内に、「永禄八年（1565）村が放火で焼き払われ、寺も炎上、さらに寒波で五穀は稔らず、五ヶ村の餓死者千余人。農民の呻吟の中、翌年に寺を再興、十二年愛染明王像が完成した」との墨書銘が残されていました。

（小笠原長和『中世房総の政治と文化』）

成田市奈土昌福寺の「明和七年」銘愛染明王塔には、基礎に4字10行の願文が刻まれています。

「四海泰平 風雨順時 金輪聖皇 寶祚長遠
台樹殿下 當所領主 武運長久 家門安全 子孫
長栄 如意満足」（「寶祚」は天子の位のこと）

戦国期の土豪がそのまま近世の有力農民になった下総の農村部では、地球規模の泰平から、天皇、領主、家と子孫の長栄と祈願するという世界観で、愛染明王に祈っていたと思われます。



愛染明王については、古来から息災、利益、降伏、敬愛を祈る愛染明王法が行われ、特に中世では戦勝、息災の修法が盛んで（直江兼続の「愛」の兜）、千葉氏や相馬氏一族が拠った北総の古城跡の寺社などでは、近世になっても、愛染明王塔が建てられています。

愛染明王像は、江戸時代前期では、時（齊）念仏講などの主尊の大日如来の脇侍として、また二十六夜講の本尊とされてきました。

江戸後期～近代、都市部では染物業や水商売（遊女）の信仰を集めたといわれる愛染明王ですが、北総の農村部では十九夜講や二十三夜講と並ぶ月待講の一つの「二十六夜講」の主尊として祀られ、二十六夜講のその多くは女人講で、八千代市大和田新田では平成期にいたっても存続しています。

江戸後期、庚申塔なども文字塔に変わり、石塔に仏像を刻むことがなくなる中で、北総各地では繊細な愛染明王像塔が単独で建立されています。

愛染明王像の法力ある姿に、ムラの安寧とイエの長栄を祈願し、女人講に加えてムラとしての発意と協力があったのではないかと思います。



寛政6年(1794)
我孫子市新木 葺不合神社

ご清聴ありがとうございました